



No.201

ティーブレイク

Tea Break

現代のシュリーマン

会員 正林 真之

「機会は平等に、過程は公正に、結果は正義に見合うように」というのが、韓国の文政権のスローガンであるが、商売の世界というのは、いささか不公平である。この不公平を認めずして商業の発展も無いので、かのスローガンを徹底しようとしている限り、お隣の国の経済状況は良くはならないであろう。

また、我が国でも「ワークライフバランス」というものが声高に言われ、働き過ぎないことが美徳のように讃えられている。確かに、「適度に働き、適度に食べる」というのは健康の秘訣ではあるものの、成長期の子供が「過度に運動して、過度に食べる」ように、成長期の企業体というのは「過度に働き、過度に食べる」ようなことがないと、成長は覚束ない。なので、ワークライフバランスが先行する限り、スタートアップが伸びる社会は、あまり期待できないことになる。

ところで、お金儲けや商売をする際には、人間というのは「食費を削って、趣味のものを買う」ものだ、という購買行動を理解しなければならない。実際、卵や牛乳といった命に必要なものや、医療といった命に関わるものは安く、生命には関係の無い美容や金融、ブランド品のほうが高額なのである。

こうしたことを理解しないので、大抵の人は、「世の中に必要なもの」を必死になって提供しようとして、金儲けをすることができず、最終的には失敗する。特に今の日本では、これらは必ず「安値」となり、あるいは安く一般に提供されるように取り図られてしまうからである。

こうしたことがある一方で、「趣味のもの」のような嗜好品や「好きなもの」は、高く売れる。こうした「世の中のためにならないもの」を提供しては大儲けする者

が居る一方で、「世の中のためになるもの」を提供してはビジネスに失敗する例は、後を絶たない。本当に、商売の世界というのは不公平なのである。

これを解決するためには、やはり、「世の中のためにならないかもしれないが、とりあえず金儲けにはなるもの」を権利ビジネスを使って資金を獲得し、それを「世の中のためになる事業に使う」というモデルが必要であるように思う。

これは実は、古くて新しいモデルであり、かのシュリーマンは、まずは事業で儲けてから、トロイ遺跡の発掘という“夢”の事業を実現させた。江戸時代の金原明善もそうであるが、東京都庁も、宝くじの利益で建てられている（金原明善の時代は、“富くじ”）。

しかしながら、自分の今までの経験からすると、こういった“カネづくり”というものを、“モノづくり”の方々というのは軽蔑する傾向にあり、しかも「ゼニカネの問題ではない」となりふり構わず研究に没頭する姿勢のほうを評価する傾向にあるように思える。そうして、財務責任者が止めるのも聞かずに研究に没頭し、いずれは資金枯渇で自滅していってしまう。これが、技術系スタートアップや、大学や医療機関などが上手く立ちいかない原因の一つを構成してしまっている。

大企業にしても、自社の実施品についてだけ特許権を取ることに腐心し、それよりも程度の低い廉価品について特許を取得することを考えず、結果的に廉価な模倣品に駆逐されてしまう例が後を絶たない。つまり、本来であれば「儲けられるもの」や「商売になるところ」を見逃してしまい、その部分の権利は取っていないのである。言い換えれば、英検の1級や準1級のところだ

けで商売をしようとし、本当にカネになる3級や4級のところを見逃しているに等しいだろう。

実は、大学のTLO（技術移転機関）として、本来の役割は、研究の本丸部分のところの技術移転だけではなく、おカネになりそうな周辺技術や関連技術について上手くライセンスし、それらを上手く資金化（マネタイズ）することも、重要な仕事の一つであったのである。ただ、時の経過につれて、どうしても“モノづくり”のほうに引っ張られてしまい、“カネづくり”のほうが疎かになってしまう。

けれども、かの下町ロケットを見れば明らかである

が、帝国重工に対して権利主張した特許は、それまでの佃製作所の製品とは無関係の特許である。権利主張した特許は、主人公がかつて宇宙技師であった経験からなされた「趣味の範囲でとられた特許」なのであり、まさに知財それ自体の価値を存分に生かしたケースである。

我々弁理士というのは、こうした“モノづくり”と“カネづくり”のバランスをうまくとりながら、これらを上手く繋いでいくべきなのであるし、特に大学や医療機関など、世の中のためになる事業を行うようなところは、こうしたことを考えて、間違いのない知財戦略を立てるようにしたいものである。